

第 131 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2006 年 12 月 14 日(木) 18 時 00 分~19 時 30 分

場 所: 創立 30 年記念棟大会議室「常念岳」

演 者: 金子 讓 氏 (東京歯科大学学長)

タイトル: 21 世紀の歯科医療 - 歯科医療の安全性と快適性をめざして -

歯科大学の役割は、1. 歯科医師の養成 2. 歯科医学・歯科医療の開拓と地域医療の拠点 3. 人間形成と教養教育(人間力と知識)である。これらは、歯科大学の社会的使命であり、いいかえれば原点であるので、それぞれは軽重をつけられなく、またどれも欠かすことができない。

現在の歯科大学・歯学部(歯科大学)は、教育改革、医療改革の渦中にあり、その対応に各校努力を傾注しているが、改革をしなければならない背景にはわが国の人口動態、つまり少子高齢化という大きな問題が横たわっている。したがって、苦難の道にあるのは歯科大学だけではなく、18 歳人口の継続的な減少の時代にある日本の大学すべてが、自校の存続を賭けた教育を主体にした改革に取り組んでいる。

一方、医療改革の大綱の一つに安全で安心の医療提供がかかげられている。8020 運動の成果がみられている現在、将来的にはさらに多数の歯牙を保っている高齢者が増してくる。

しかし、加齢現象ともあいまって歯やその周囲組織はかならずや歯科治療が必要な時が、患者のライフサイクルのどこかでやってくる。特に脳血管障害や痴呆になって健康な時の口腔管理が自身でできなくなったとき、さらには末期の状態では、口腔環境は急激に悪化して咀嚼は著しく障害される。それまで予防対策と口腔管理で健康な歯と口腔の状態にあったものが、この時歯科治療が必要となる。つまり、全身的にハイリスクの状態のときに歯科治療という侵襲を加えなければならなくなる。

歯科治療における患者の全身的な危険性は、アレルギーや中毒といった薬物に起因するほかにいくつかの原因に分類できるが、中でも全身的偶発症の原因として頻度や重症度の観点から注意すべきは、歯科治療というストレス(ストレッサー)である。歯科治療時の痛みや緊張が、生体の恒常性を変化させ、生じた循環の抑制あるいは亢進が生命さえ奪う。

歯科治療時に起きる全身的な異常(全身的偶発症)の発生頻度は、0.004 - 0.007%である。その中の約 8 割前後はストレスに起因している。したがって、痛みや緊張をさせないストレスフリーの快適な歯科治療が安全性と連動する。とくに、有病者や高齢者で予備力の低下した患者の安全管理の主眼は、快適な歯科治療状態に置くことである。団塊の世代が高齢化する近い将来、安全と快適性を根底にした歯科治療が普遍化していなければならない。

歯科治療における将来の需要は、予防、インプラント、そして高齢者歯科が増加すると識者のアンケートでは示されている。後二者は歯科医療の安全性と快適性が求められる分野である。

障害者歯科学講座と診療科を早期に発足させ、また歯科麻酔学の2代目教授を決められた先進的な松本歯科大学に敬意を表しながら、歯科医療の安全性と快適性のこれからについて、教育、研修、研究、そして診療上の起こりやすい医師法、歯科医師法問題などから述べてみたい。